



天理の紹介

私にできる人だすけ



このページでは、天理を紹介します。天理市、天理教など天理にまつわるもの、いろいろを紹介したいと思っています。

2回目の今回は、天理高校の通う山口みお「私にできる人だすけ」を掲載します。天理高校は天理教の高校ですからその信仰を培う諸々の行事がありますし、正課でも「教義」の時間があって、お道の勉強もしています。この一文が載った「信条教育叢書」は天理高校教義科が編集して毎年度末に発行されている小冊子です。この号には33人のテーマに沿った文章が掲載されています。

私にできる人だすけ

— 1-K 山口みお

わたしにできる人だすけ。いろいろ考えてみました。私にできる事といえば『ひのきしん』だと思います。今夏「おぢばがえりひのきしん」を通していろん

な事を経験し、学ばせていただきました。

最初は正直言って「おぢばがえりひのきしん」にはあまり参加したくないと思っていました。しかしある日、私は寮で友達とぶつかってこけ、あごを5ハリ縫う大きな傷を負いました。その時は痛いという気持ちでいっぱいでしたが、この身上を通して親神様が私に対して何か言っておられるのだと考えました。

ひのきしん精神の足りなかつた私に、「このおぢばで、もつともつとひのきしんや周りの人に対する気づかい、心づかいをし、そして自分にできる人だすけをなんでもいいからやりなさい。」というふうに言っておられる、と私なりにとらえました。それから、休みの日には参拝、土持ひのきしんにも行かせていただきました。そして「おぢばがえりひのきしん」に参加する決意をしました。

準備期間から参加しましたが、初めての経験で最初は不安でいっぱいでした。本期間に向けての草抜きやペンキ塗り、

とても重い机や畳を運んだり、しんどくて大変でしたが、この作業が終わらなければ、周りのみんなに迷惑がかかるし、何より「おぢばへ帰って来る子供達のために」という思いで頑張りました。

本期間ではミラクル大冒険の誘導ひのきしん、又は子供達のカードにスタンプを押ししたり、通路の砂ぼこりを払ったり、子供達に喜んでおもうと一生懸命にひのきしんに勇みました。子供達の笑顔は私の心の「オアシス」でした。その笑顔に感動して天理高校に来て本当に良かったと思うとともに、私自身「おぢばがえりひのきしん」を振り返って、人の役に立つために一生懸命尽くすことは素晴らしい事だと強く感じました。

私には、大きな人だすけはまだ何も出来ないと思います。でも、周囲の人達に喜んでもらえるように、心、身体を使うことが出来ると思います。それが今の私に出来る人だすけ「ひのきしん」です。

おやさま逸話篇から

一七一

宝の山 (たからのやま)



宝の山

教祖のお話に、

「大きな河に、橋杭のない橋がある。その橋を渡って行けば、宝の山に上ぼって、結構なものを頂くことが出来る。けれども途中でまで行くと、橋杭がないから揺れる。そのために、中途からかえるから、宝を頂けぬ。けれども、そこを一生懸命で、落ちないように渡って行くと、宝の山がある。山の頂上に上ぼれば、結構なものを頂けるが、途中でかわしい所があると、そこからかえるから、宝が頂けないやで。」

と、お聞かせ下された。

■『稿本天理教教祖伝逸話篇』

『教祖伝』を信仰の立場から補い身近におやさまに接することが出来るようにとの思いから編まれたのが『稿本天理教教祖伝逸話篇』です。

このページでは、そのなかから適宜紹介していきます。

■信仰的成人の道中(過程)を説かれた逸話と考えます。旧約聖書・ヨブ記のテーマと相通じるものがあると思います。

ヨブ記の試練は神がヨブに課したものであることは、旧約聖書の本文から読み取れますが、逸話篇の、
「途中でまで行くと、橋杭がないから揺れる」とか「山の頂上に上ぼれば、結構なものを頂けるが、途中でかわしい所があると、そこからかえるから、宝が頂けないやで」というよ

うな表現には、それを神がなしているという文脈が見えにくいですね。信仰と懐疑との間で揺れる人間の心を、揺れる吊り橋のイメージに重ねて表現されたものと考えます。

しかし、神の試練(不合理、矛盾、不可解な人生)を乗り越えたところに、至福の世界があります。神を信じる者の苦難の経験が真実のたすけに浴する重要な要件とも思えます。逸話篇の「宝の山」というのは、このような至福のたすけ、「ここがこの世のごくらくや」と言われる陽気ぐらしの世界を言われたものです。いかなることがあろうとも、苦難・試練を、敬虔な信仰と「たんのう」の心(すべてを神の配慮として受け入れる柔軟でしなやかな心)で通りたいものです。